





赤ドラ麻雀完全攻略

著／土井泰昭 発行／マイナビ出版

発売／2010年9月

「歌は世につれ、世は歌につれ」といわれるように麻雀もまた「赤ドラは世につれ、世は赤ドラにつれ」であった。


時はまだ昭和50年代。私が上京した頃のフリー雀荘には赤ドラがあった。

 2枚のところが多かったようだが、私が最も接したのは  と  だ。当時から赤が5だと麻雀が変わると雀荘も感じていたからだろう。他には 、 もあった。同じ感覚でこれを選択したのだと思う。

赤ドラを採用していた多くの雀荘はブー麻雀で(関東ではスポーツ麻雀と呼ぶこともあった)、雀荘によってまちま

ちだが多かったのは6000点持ちで誰かがとぶか、6000点プラスになったところで終わるルールで短期戦だ。雀荘にしてもはやく終わればゲーム代が増えるので、なおさら赤ドラを採用したくなる。

やがて、リーチ麻雀が主流となり、ブー麻雀がほぼ消えた頃、同時に赤ドラも消えた。この時代はまだ麻雀の魅力を一方で手役作りの妙に強く求めていたので赤ドラは邪道と思われていたのだろうか。

聞けば、この時代よりも前に  が登場した時代があるという。こうして、赤ドラというのは生まれては消え、消えては生まれるものなのだろうと、その当時の私は思っていた。

ところが、この昨今である。ネットでは赤ドラありが当たり前で、フリー雀荘も赤ドラがないところは稀少だ。麻雀と

は赤ドラがあるものという感覚が浸透したいま、これがまた消えることがあるのだろうかと考えると、私はもう消えることはなく、ウラドラのように定着するのだろうかと感じている。

最高位戦日本プロ麻雀協会や日本プロ麻雀協会は一発・ウラドラありのルールで打っている。このルールになったのも10年ちょっと前のことで、じつは私が提唱し、多くの反対意見を受けながらも新津潔代表がルール変更の断を下した。これによってプロの対局による一般的な麻雀の戦術作りを展開することができたわけである。

だが、いま、ついに赤ドラありが一般的になった。プロ団体がこれを採用すべきかどうかの判断を迫られる日がやがてくるだろう。赤ドラありだと競技性が損

なわれるイメージがあるし、この時代だからこそ赤ドラがないことで競技性を強調できるメリットもある。だが、大衆が求めているのはどちらか。

プロ団体はこれからこのラスマエ・オーラスの条件戦のような難局を迎えることになるのは間違いないのだが、さて、何を選択する？